

- (1) 九州国語教育研究懇話会 第二号 一九九八年三月三十一日
- (2) 野地潤家「西尾理論の成立と発展」(倉沢栄吉・田近洵一・湊吉正編著『教育学講座第八巻 国語教育の理論と構造』学習研究社 一九七九年一月二七日 二七六頁)
- (3) 西尾実『国文学入門』弘文堂 昭和二六年一月三〇日 四八～四九頁
- (4) 西尾実「道元禪師」『信濃教育』大正三年四月 十一頁  
引用文は西尾実の著書『信州教育と共に―初期試論集―』(信濃教育出版部 昭和三九年八月)に「道元禪師」
- (5) 『信濃教育』大正三年四月(五頁)を収載する際に、西尾自身が付した自己解題の文章の冒頭文である(五頁)。
- (6) 西尾実「道元遺著の放つ光輝」『道元』昭和二五年四月 二～三頁
- (7) 西尾実「道元禪師」研究『大法輪』昭和三八年三月 二七頁
- (8) 西尾実『教室の人となつて』国土社 昭和四六年二月五日 一一七～一八頁
- (9) 西尾実「巢に帰る(一)」『実践国語』昭和四〇年五月 五頁
- (10) 西尾実『教室の人となつて』国土社 昭和四六年二月五日 四五～四六頁
- (11) 『西尾実国語教育全集』第十巻 教育出版 昭和五一年六月二二日 五〇六～五〇八頁
- (12) 安良岡康作「西尾実の生涯と学問(その三)」『下伊那教育』第一七五号 平成四年十一月 五五頁
- (13) 東大時代の西尾実の聴講ノートを対象にした先行研究としては、調べ得た範囲では、安良岡康作「西尾実の生涯と学問(その三)」『下伊那教育』第一七五号 平成四年十一月(一)があるだけである。安良岡論文は丹念な調査が行われており、得るところは大きい。しかし、聴講ノート一つ一つの検討は残された課題になっている。本稿で取り上げた村上専精の聴講ノートも、未だ手がつけられていない。
- (14) 『西尾実年譜』『西尾実国語教育全集』第十巻 教育出版 昭和五一年六月二二日 五〇八～五〇九頁
- (15) 原文は横書き算用数字である。
- (16) 注(11)に同じ
- (17) 注(12)に同じ
- (18) 『近代日本総合年表第三版』岩波書店 一九九一年二月二五日 二一七頁
- (19) 西尾実『教室の人となつて』国土社 昭和四六年二月五日 三九頁

## (付記)

引用文献の漢字表記については、新字体に改めた。  
引用文献の発行年は、その文献の奥付に従った。  
年号あるいは西暦のどちらかに一定していない。

講」とある。この日の見出しは「St. Francis」で、「中世盛期之キリスト教」の後に続く内容展開になっている。ノート末尾には、「(千九百十三年五月二十八日講了ル。)」と書きこまれている。『学生便覧』には、姉崎正治の講義は大正二年度・三年度には開講の表示はない。ハーバード大学に日本文明講座が開設され、姉崎正治が招かれて日本宗教史などを講義した。大正二年のことである。<sup>(18)</sup> 結局、姉崎正治講義「中世盛期のキリスト教」は大正元年度の開講であったといえる。西尾実の聴講も、また、大正元年度で対応が認められた。このように整理すると、先行研究には開講・聴講年度に揺れがあることがわかる。

## 五

西尾実と道元との出会いの時期が明瞭になってきた。大正元年度の村上專精の講義であった可能性が高かった。西尾実と道元との出会いについて、さらに検討を続ける。ノートAには、先に示したように、見開き十二頁の右側に「四栄西禅師ノ宗義」という見出しがあり、その横には「(一九一二年十一月十一)」という書きこみがあった。書きこみは「大正元年十月十一日」と読むことができた。当日以前の分が見開き十一頁あることになる。この内、最初の七頁分は白紙であり、空白のままになっている。書きこみの日付以前で、実際に書かれているのは見開き四頁分である。ノートの記載状況から見て、講義一回分位の分量であろう。聴講の日は、「大正元年

十月十一日」以前ということになる。ノートは、後から書かれたものではなかった。講義中に書きとめた跡が歴然とわかる書き方になっている。とすると、西尾実は大正元年十月の早い時期から、村上專精の講義を聴講していたことになる。

西尾実は大学入学時のことを回想して、つぎのように述べている。

十月三日までという入学手続きをかううじてすませました。その日から時間割を調べて、聴講や演習出席の予定を立てましたけれども、学年は九月なかばからはじまっていたはずですから、中には、一回もしくは二回欠席になった学科もありました。<sup>(19)</sup>

西尾実は大学入学の手続きを十月三日にすませ、その日から聴講計画を立てたという。西尾実の証言は、村上專精の講義の聴講時期と符合するところがある。村上專精の講義の聴講は、西尾実の場合、入学早々の頃に始まったのではなからうか。反面には、先に掲げたように、西尾実の聴講はいわゆる中退事件後の再出発時に行われたという説明がある。西尾実は、いつに聴講を決めたのだろうか。中退事件の前と後とは、その後の位置づけが変わってくる。さらなる精査が求められる。

(この項続く)

## (注)

(1) 拙稿「飯田時代の西尾実(五)」『国語科教育研究論叢』

の講義であつたであらう。なぜなら、大正元年度の講義に対応すると考えられる聴講ノートAの中で、道元が取り上げられていたからである。

大正元年度の講義であつたとする今一つの根拠がある。西尾実は大正二年十二月号の『信濃教育』に「『自』という文字」と題する論考を発表している。この中に道元のことが出てくる。調べ得た限り、西尾実の著作において道元の名前が登場するのは「『自』という文字」が最初である。本論考の末尾に「十月十五日」という日付が付されている。この日付は原稿執筆の稿了日であらう。「十月十五日」とは大正二年のことであらう。西尾実と道元の出会いは、大正二年十月十五日以前であつたことになる。大正二年十月十五日は、大正二年度が始まったばかりの頃である。聴講ノートCは大正二年度に開講された「日本仏教史（但浄土教）」の冒頭部分にあたると考えられた。大正二年九月から十月までの時期に相当する箇所を見てみよう。講義の進度が早いとしても、「平安朝ニ於ケル浄土教」当りであろうか。ノートCでは、ここまで道元の名前はでてこない。西尾実と道元との出会いは、やはり大正元年度の講義にあつたと理解するのが妥当であらう。

西尾実の聴講について、先行研究は時期を明示していなかった。つぎに、先行研究を吟味してみる。「西尾実年譜」・安良岡康作論文は、先に示したように、各々、つぎのように述べていた。

大正二年（一九一三）二十五歳

東大での聴講範囲を、国語学・国文学・から、哲学・心理学・美学・宗教学などにひろめ、中でも姉崎正治「中世のキリス

ト教」・村上专精「日本禅宗史」などから得る所が多かつた。<sup>(16)</sup>

実（西尾実―引用者注）は、守屋県視学の返事を読んで、いたく反省させられた。（略）自己の未熟を恥じ、中退の意志を捨てて、改めて一念発起し、在学を継続することに決めた。そこで、聴講の範囲を広くし、松本教授の「心理学概論」、桑木教授の「哲学概論」、姉崎教授の「中世期の基督教史」、村上講師の「日本仏教史」など、幅広く講義を聴くことにした。<sup>(17)</sup>

ここに上げられた授業者名と講義題目名とを『学生便覧』記載のものとは比べてみよう。『学生便覧』では、松本亦太郎教授「心理学概論」（大正二年度の開講）とある。西尾実の聴講ノート「心理学概論（松本亦太郎教授）」全五冊の内、最後の五冊目の本文末尾に「二九一四・五・二八講了」とあることにより、本講義は大正二年度に開講され、実際に聴講されたことがわかる。これに対し、桑木厳翼教授「哲学概論」の場合、『学生便覧』では大正三年度開講になっている。また、姉崎正治の講義は、『学生便覧』では「中世盛期のキリスト教」（大正元年度開講）になっている。姉崎正治の講義に係わる西尾実の聴講ノートは『西尾文庫』には二冊収められている。日時の点から二冊をまとめると、つぎのようになる。二冊の内、一冊のノートの題名は「中世盛期之キリスト教」であり、「第二グレゴリオ七世ノ事跡」という見出しに始まる。ノートの最後の部分に「二月十九日講」と記入されている。「二月十九日講」の見出しは「St.Francis」とある。今一つのノートの題名は「中世期之基督教」である。見開き第一頁の巻頭に「千九百十三年二月二十六日

日付の書きこみでは、さらに、ノートDに注目したい。ノートDの見開き第十七頁の右側に「五月二十三日」という日付がつけられている。

1、夢窓と足利尊氏との関係。

2、春屋と足利義満との関係。

（妙心寺出立の由来。）

3、関山と妙心寺

4、夢窓と天龍寺

5、臨済宗と曹洞宗との比較

右五問中一論文を作成提出の事。

（五月二十三日）

日付は、学年末の「試験論文」の課題を伝える文章の末尾に書かれていた。ノートDは、聴講する講義の最後の部分であった。先に述べたように、ノートDはノートA・ノートBに連なり、三冊群の最後に位置していた。「試験論文」の課題の「1」から「5」に係わる事項は、全てノートA・B・Dに対応している。これから、ノートA・B・Dは三冊で一組であり、三冊で一つの講義をカバーしたことがわかる。

では、ノート三冊一組でカバーした講義はどの年度分だったのだろうか。聴講ノートA・Bの見開き第一頁に記入された講義題目と『学生便覧』記載のそれは、「日本仏教史（鎌倉時代）」で完全な一致を見せていた。ノートAには、「大正元（一九一二年）年十月十一日」と了解可能な「（一九二一—一九二二）」という書きこみがされていた。「日本仏教史（鎌倉時代）」の開講は、『学生便覧』では

大正元年度になっていた。これらをまとめると、つぎのようにいえるのではないか。ノートA・B・Dは、大正元年度開講の「日本仏教史（但鎌倉時代）」の聴講ノートであった確率が高い。

ノートCは、他の三冊とは一線を画していた。対象とする講義が他の三冊とは違うのではないかと先に述べた。ノートCには「日本仏教史概観（浄土教）」という標題の下、浄土教の史的推移が時代順に記されていた。ノートCは、内容面から見ると、大正二年度に開講された「日本仏教史（但浄土教史）」の冒頭部分にあたると考えられる。ここに、冒頭部分という言い方をしたのは、ノートCが未完で終わっているからである。内容の上からは、この続きが予想される。ノートCに接続するノートがあるのではないか。調べ得た範囲では、ノートCに続く存在は見つけることができないでいる。今後の調査に待ちたい。

ここまで、東大時代の聴講ノート七十冊の内、村上專精の講義に係わる分四冊について、その関係性を明らかにしてきた。繰り返すことになるが、確かめておきたい。ノートA・B・Dの三冊は大正元年度開講の「日本仏教史（但鎌倉時代）」に、一方、ノートCは大正二年度開講の「日本仏教史（但浄土教史）」に各々対応する可能性が高い。言いかえると、西尾実における村上專精の講義の聴講は二個年度にわたっていたことが推量される。村上專精の講義の聴講は、一度ではなかった。二個年度にわたって、二度の聴講であったようだ。二度の聴講は、大正元年度と大正二年度であり、二年連続しての受講であったようである。

二個年度の聴講の内、西尾実が道元の話聞いたのは大正元年度

## 4、法然上人立教開宗ノ精神

## 三、鎮西六派發展ノ概況

## 四、白旗名越兩派發展ノ概況

ノートCには、浄土教の史的展開が書かれている。他の三冊とは、趣が大きく異なる。ノートA・B・Dの三冊は共に禅宗史が主題であり、しかも時系列にそって主題が展開されていた。三冊には緊密な連続性があった。その意味では、ノートCと他の三冊とは一線を画している。このことは何を物語っているのだろうか。つぎのような予想が立つ。ノートA・B・DとノートCとは、聴講の対象が違うのではないか。別々二つの講義の聴講ノートだったのではないか。つぎに、このことについて確かめてみよう。

## 四

西尾実の東大入学は大正元年十月であり、卒業は大正四年七月であった。しかし、卒業後も大正七年八月に松本女子師範学校へ赴任するまで東大の講義の聴講を続けた。<sup>(14)</sup> 西尾実が東大の講義を聴講できたのは、大正元年十月から大正七年八月までの期間であった。この時期の学年暦は、九月に始まり七月に終わる。学年暦を考慮すると、西尾実の聴講の時期は大正元年度（大正元年九月～大正二年七月）より大正六年度（大正六年九月～大正七年七月）にかけてということになる。この間の講義の開講状況は、つぎのようであった。

『東京帝国大学文科大学学生便覧』には、当該年度の講義題目が授

業者名と共に記されている。『東京帝国大学文科大学学生便覧』により、大正元年度より大正六年度までに開講された村上専精の講義題目を年度別に掲げる（表記は原文のママ）。

・自大正元年九月 至大正二年七月

「日本仏教史（但鎌倉時代）」

・自大正二年九月 至大正三年七月

「日本仏教史（但浄土教史）」

・自大正三年九月 至大正四年七月

「日本浄土教史 但シ真宗教史」

・自大正四年九月 至大正五年七月

「日本仏教史（徳川時代）」

・自大正五年九月 至大正六年七月

「禅宗史」

・自大正六年九月 至大正七年七月

「日本仏教概論」

『東京帝国大学文科大学学生便覧』（以下、『学生便覧』と略す）記載の講義題目名と西尾実の聴講ノートのそれを比べる。ノートAとBには、先に紹介したように、見開き第一頁の左側に「日本仏教史（鎌倉時代）」と書かれていた。『学生便覧』記載の講義題目中、大正元年度の題目名と一致する。ノートAには、これも先に示したように、見開き十二頁の右側に「四 栄西禅師ノ宗義」という見出しがあった。この見出しの横に、「（一九二一―十一）<sup>(15)</sup>」という書きこみがされている。これは聴講の日付であろう。日付は大正元（一九二一）年十月十一日と読むことができる。

時代禅宗史の概観」以降のことが記述されている。見開き第一頁を開くと、左側の冒頭に「2、初期の臨済宗。」という見出しがある。そして、これに対応する右側の冒頭文は「徳川時代ヲ大観スルニ愚堂ノ出世ヲ以テ初期ノ盛観トナシ、又白隠禪師ノ出世ヲ以テ後期ノ盛観トナス。」とある。内容上からはノートBの後にノートDが来ると考えられる。このことは見出しによくあらわれている。つぎに、ノートDの見出しを掲げる。

## 2、初期の臨済宗

(1) 愚堂東庵ノ出世及門下

(2) 愚堂ノ児孫

(3) 沢庵宗彭ノ出世

## 3、後期ノ臨済宗

(1) 白隠ノ出世

(2) 白隠門下ノ繁栄

(3) 古月ノ出世並其門下

## 4、徳川時曹洞宗

(1) 概況

(2) 心越來朝

(3) 万安月舟等ノ出世

(4) 卍山梅峰等ノ出世

ノートDの内容は、このようにノートBのそれを引き継ぐものになっている。ノートDはノートBの後に位置づけることができる。かくて、四冊の内、ノートA・ノートB・ノートDの三冊の関係が明らかになった。即ち、ノートAの後にノートBが続き、さらに、

ノートBの後にノートDが来るという順序である。つぎに、ノートCをみてみよう。見開き第一頁の右側であるが、その冒頭に「日本仏教史概観（浄土教）」と書かれている。ついで、「第一期 無宗派時代」という見出しが記されている。以下、見出しの部分を掲げると、つぎのようになる。

## 日本仏教史概観（浄土教）

### 第一期 無宗派時代

(第二) 推古朝以前ニ於ケル日本仏教史ノ概観

(第二) 推古朝ニ於ケル仏教発展ノ概況

### 第二期 有宗派時代

(第二) 奈良朝ニ於ケル支那宗ノ伝来

法然上人以前ノ浄土教史

第一節 奈良朝以前ノ浄土教

第二節 平安朝ニ於ケル浄土教

(第二) 慈覚と浄土教

(第三) 源信僧都。

(第四) 空也上人。

(5) 良忍上人ノ融通念仏宗

(六) 覚鑊上人ノ念仏弘通

(六) 永観律師等ノ念仏弘通

平安末期ニ於ケル浄土思想

日本仏教史上ノ声明

源空上人の浄土宗開立

撰択集ニ対スル評破

縦書きにて、こう書かれている。

## A

村上文学博士述

日本仏教史 卷一

(鎌倉時代)

東京帝国大学

文科大学文学科

## B

村上博士講

日本仏教史 卷二

(鎌倉時代)

東大文科大学

ノートAとノートBは、表紙の(一)(二)及び見開き第一頁の「巻一」「巻二」の記載から連接していることが予想できる。予想を確かにするために、ノートAとノートBの内容を比べる。先ずはノートに付された見出しをみてみよう。見出しの引用は原文表記のままである(以下同じ)。ノートAは、見開き二頁から七頁まで、白紙のまま空白になっている。最初の記載は、見開き八頁からである。見開き八頁の右側に最初の見出しが書かれている。見出しは「栄西略伝」とある。これに続く、見出しを掲げる。

栄西略伝

三 栄西の人格

四 栄西禅師ノ宗義

五 栄西ノ門下

△三傑小伝

(1) 明全小伝

(2) 行勇小伝(鎌倉)

(3) 栄朝小伝(上州)

道元禅師の出世(曹洞宗初仏)

道元禅師略伝

道元禅師性行

道元禅師ノ著書

道元ノ家風

第五 臨済禅宗最盛時代の概観

(1) 臨済宗盛ナリシ所以

二 臨済宗ノ発展ト五山十刹

三 臨済宗各派ノ大系

四 関東禅勃興ノ大系

ノートBの見出しは、つぎのようである。

(四 関東禅勃興ノ大系)

(1)、道隆普寧ノ来朝及其門下)

2、祖元ノ来朝及其門下(一字不明) 日ノ嗣法(続)

3、一山ノ来朝並ニ雪村友梅

五 京都禅勃興ノ大系

第七章 曹洞宗全盛時代ノ概観

徳川時代禅宗史の概観

ノートAの最終の見出しは「四 関東禅勃興ノ大系」であり、また、ノートBの最初の見出しは「(四 関東禅勃興ノ大系)」である。ノートBは、ノートAが終わったところから始まっている。これにより、ノートBが形式・内容の両面においてノートAに接続していることが明瞭になった。

つぎに、ノートC・Dとの係わりをみてみよう。最初にノートDを取り上げる。ノートDは、ノートBの最終の見出しである「徳川

いる。西尾実自身の証言と同じである。つぎに、安良岡康作「西尾実の生涯と学問（その三）」（『下伊那教育』第一七五号 平成四年十一月）をみてみよう。「西尾実年譜」以後の年譜研究では、本論考が最も詳しいからである。

実（西尾実―引用者注）は、守屋眞視学の返事を読んで、いたく反省させられた。（略）自己の未熟を恥じ、中退の意志を捨てて、改めて一念発起し、在学を継続することに決めた。そこで、聴講の範囲を広くし、松本教授の「心理学概論」、桑木教授の「哲学概論」、姉崎教授の「中世期の基督教史」、村上講師の「日本仏教史」など、幅広く講義を聴くことにした。<sup>(12)</sup>

西尾実が村上専精の講義を受講した時期は、明示されていない。「そこで」とあるばかりで定かではない。また、これ以上の言及もなかった。ただ、受講の時期は中退事件の後であるとする。その点は、先学と同じである。

西尾実の証言、先行研究は、このようである。これをまとめると、つぎのようになる。

・西尾実が東大で村上専精の講義を聴講したのは、中退事件後のことである。

・聴講の時期については、大正二年度説と不明示説とがある。

### 三

では、実際のところはどうかだったのだろうか。つぎに、この二点について検討していこう。検討材料には、同時代資料を用いる。同時代資料の一つとして、西尾実には東大時代の聴講ノートが残されている。その内、下伊那教育会に設けられた『西尾文庫』には七十冊のノートが収められている。これら七十冊の聴講ノートを主な材料にして、聴講時期の謎に迫っていききたい。<sup>(13)</sup>

東大時代の聴講ノート七十冊の内、村上専精の講義に係わる分は四冊である。だが、四冊の接続関係は明瞭ではない。そこで、四冊の関係を確かにする作業から始めることにしたい。

四冊のノートの表紙は、横書きで、つぎのように記されている。なお、AからDのノート名は便宜的な仮称である。

|   |                                  |
|---|----------------------------------|
| <p>A<br/>日本<br/>仏教史<br/>村上講師<br/>(一)<br/>西尾</p> | <p>C<br/>日本仏教史<br/>村上講師</p>      |
| <p>B<br/>日本<br/>仏教史<br/>村上講師<br/>(二)<br/>西尾</p> | <p>D<br/>日本<br/>仏教史<br/>村上講師</p> |

ノートAとノートBには、さらに、見開き第一頁の左側に墨筆の



ていないのに、教員養成を目的とした機関でない大学へ入学したいというから、将来、師範学校卒業生のために発展の道をひらこうと相談して、義務免除の認可を知事から特別にしてもらったばかりである。それを途中退学したいとは、もつてのほかである。あいだに立つて、そのために奔走した師範学校長や僕としては、どんな理由があるか知れないが了解できない。」ということでありました。その第二は、「退学後は戸隠の分教場で先生をしながら勉強をしたいとのことであるが、長野県では教育を学問をするための方便にするというようなことは絶対に承認することはできない。これはすでに君も御承知のはずである。だから、途中退学などいうようなことは思いとどまるべきである。」という御返事でありました。

いちいちごもつともで、わたしの早計をおわびし、未熟をはじるほかはありませんでした。ここで一念發起して、在学を継続することになりました(略)<sup>(10)</sup>。

西尾実が「覚悟をあらたにして」、村上専精の講義を聴講し始めたのは、いつだったのだろうか。西尾実自身は、先に示したように「大正二年の九月」と回顧していた。先行研究はどう見ているだろうか。西尾実の年譜研究において、最も信頼度の高い著作は西尾光一「西尾実年譜」(『西尾実国語教育全集』第十巻 教育出版 昭和五一年六月二二日)であろう。「西尾実年譜」には、つぎのように記されている。<sup>(11)</sup>

明治四十五(大正元)年(一九一二)

二十四歳

四月、大下条尋常高等小学校に転任し、高等科一・二年を担任

する。大下条村深見の松沢という遠い縁の家に止宿した。飯田の江戸町で実行字館という塾を開くかたわら印刷業を営み、また『南信新聞』の経営にも加わっていた星野三郎の次女で、飯田小学校時代の同僚であった星野ますと結婚。六月、農事休暇を利用して上京し、東京帝国大学文科大学文学科選科(国文学専攻)に入学のための願書を提出した。九月十三日、明治天皇大葬の当日、入学試験が行われた。文科大学選科の受験者八十名中、合格者は十一名で、国文学専攻は、同じ長野師範の四年先輩で、その年東京高等師範学校を出た坂井衡平、後に国語学者となった湯沢幸吉郎との三名であった。九月三十日付で大下条尋常高等小学校を退職、上京して、再び学生生活に入った。(略) 十月、長野県知事千葉貞幹名の「服務義務免除ノ件聞届ク」旨の通達があった。芳賀矢一・藤村作・垣内松三などの講義を聴講したが、中途退学しようとして、長野師範学校時代の恩師で、当時、県学務課主席視学をしていた守屋喜七にたしなめられて、思いとどまった。

大正二年(一九一三)

二十五歳

東大での聴講範囲を、国語学・国文学・から、哲学・心理学・美学・宗教学などにひろめ、中でも姉崎正治「中世のキリスト教」・村上専精「日本禅宗史」などから得る所が多かった。坂井・湯沢の他、同級の井上超・沼沢竜雄や、一年あとに入学した島津久基・宮崎晴美などと親しんだ。六月、長男光一出生。この年、本郷弓町の下宿、初音館に移った。

「西尾実年譜」は、村上専精の講義の受講年を大正二年度として

の信濃教育という雑誌に「道元禪師」というのを三月号と四月号に書いたほど感激したのです。<sup>7)</sup>

○昭和四十六年二月

わたしが道元をはじめ知ったのは、村上専精先生の日本禅宗史の講義を聞いたときで、その講義は非常に感銘がふかく、今も、その一言一句、忘れたくない印象を残しています。そんな

ことからわたしは、大正三年四月の雑誌「信濃教育」に、「道元禪師」という一文を寄せたことがあります。<sup>8)</sup>

西尾実と道元との出会いは、東大での村上専精の講義にあった。

少なくとも、西尾実はそのように受け止めていた。調べ得た範囲では、これを覆す先行研究は見ることができなかった。ここでは、西尾実の話を一つの説明として受け入れて、先に進むことにしたい。

さて、西尾実が村上専精の講義を受講したのはいつのことだったのだろうか。西尾実自身は、大正二年九月からの年度であったと述べている。

大正二年の九月、覚悟をあらたにして聴講を続けた。最初の学年の経験から、聴講の範囲を広げ、哲学科の大塚保治教授の美学<sup>マヤ</sup>松本亦太郎教授の心理学のほかに、姉崎正治教授の「中世のキリスト教」、村上専精講師の日本仏教史のほか、文学科でも八杉貞利講師の「十九世紀のロシア」その他を聴講した。<sup>9)</sup>

「覚悟をあらたにして聴講を続けた」とある。「覚悟をあらたにして」とは、どういうことだろうか。西尾実が、東京帝国大学文学部文学科選科（国文学専攻）に入学したのは、大正元（一九一二）年十月のことである。「やむにやまれない意欲」からの進学であっ

た。それだけに入学後の授業には期待するところが大きであった。だが、現実の講義は期待に反した内容が多く、中退を考えるまでに至る。しかし、恩師に諭されて思いとどまり、再出発を遂げる。「覚悟をあらたにして」とは、大学中退を思いとどまり、再出発を図るの意であった。西尾実は、この間の事情について、つぎのように説明している。

専攻を志して入学した国文学関係では芳賀矢一先生の「文学概論」と「平安朝文学史」を聞き、藤村作先生の「元禄期の文学」と「読本の研究」などの単位を取りました。いずれも周知な講義で、文学に対する展望をひろくされ、文学研究のくわしさ・たしかさから学恩をこうむったことは多大でありました。けれども、私が教室の任務をすてて研究しようと志した目標は、そういう学問的なくわしさやたしかさではなく、もっと、人間としてのぎりぎりの問題を深くほりさげてみたいという、やむにやまれない意欲でありました。大学志望の最初にめざしたのは、哲学でありました。けれども、哲学をやるためには、高等学校を経ないから、語学力がたりないと考えると同時に、それは文学研究からも達し得られるはずだというひとりで合点で出発した気持ちもよみがえって、国文学にも学問にも未熟なわたしは、これならいっそ郷里へ帰ってひとりで研究を続けようと思いこみ、さっそく、県の学務課の主席県視学守屋喜七先生あてにこの意向を書き送った。

守屋先生からはさっそく返事があって、大いにしかられた。その第一は、「君が師範学校卒業後二年しか義務年限をはたし

西尾実は、「道元禪師」(『信濃教育』大正三年四月)の中で、「否定」について、こう述べていた。

彼(道元―引用者注)の道は調和にあらず、妥協にあらず、論議にあらず、空想にあらず、実に切々たる内実の経験を経て否定の一関に到達し、まったく否定の後超関体達の真面目に参じ得たものである。而かもこの際における彼の否定は、いわゆる空零なる否定ではなかった。すなわち真の超越であった。見神の事実であつた。<sup>(4)</sup>

「否定」は、道元との係わりの中で出現している。道元との係わりの強さは、「彼の否定」というもののいいに端的に示されている。西尾実には「否定」をもたらししたのは、道元との関係であつたろう。とすると、西尾実と道元との出会いの在り様が問題になってくる。西尾実は、「道元禪師」の執筆動機について「東大で村上専精先生の『日本仏教史』を聴講した感激を骨子として書いたレポートである<sup>(5)</sup>」と回顧している。この回顧を始めて、同じ趣旨のことが繰り返されている。西尾実と道元との出会いは、東大での村上専精の講義にあつたと。西尾実自身が、そのように認めているのである。言うまでもなく、西尾の発言は同時代のものではない。いずれも後年の回想である。しかし、時間を隔てても発言群には揺らぎがない。主張は一貫している。西尾実の回想に耳を傾けてみよう。回想の中から、時代順に三例を掲げる。

○昭和二五年四月

わたしが、道元を知った最初は、学生として、故村上専精博士の講義を聞いた時であつた。村上博士が「日本仏教史」の講義で、道元を講じられたなかで、弁道話の一節として、

予、發心求法よりこのかた、(略)

という箇所を引用せられた。きわめて短い章句ではあるが、まさに、全生命を傾け尽くして体得した一大真理を開示しようとして、その経路を感慨深くふりかえっている三十歳の道元禪師の緊張が、ありありと感銘せられたことは、村上博士の語調とともに、三十数年後の今日まで、記憶に新たなものがある。<sup>(6)</sup>

○昭和三八年三月

私は大正元年に東大の国文科に入りました。ところが、実は何か楽しい講義が聞かれるものだと思って入学してみると、それは私自身に準備がなかったからですけれども、実につまらなくて、国文以外のものばかり聞いたのです。その中に村上専精先生の仏教講座、安田家か何かで寄付して、それで初めて聞かれたので、日本仏教史の講義が続いたのです。それで、それを伺っている間に道元禪師のことが出て、これは今でも一言一句忘れないところがあるほどひどく感激して、道元禪師という人に打たれたわけです。これは道元禪師の生涯を道元禪師のお書きになった弁道話とか学道用心集とか、あるいは普勸座禪義というような文句を引いてお話下さったのですが、それで初めて正法眼蔵という本の名前を聞いたわけです。しかしそのころ正法眼蔵は決して読みはしなかった。私は道元禪師の伝記やそういう関係のものを図書館で読んで、たしか大正三年に私の郷里

## 西尾実と道元

杉 哲

一  
本稿は、西尾実国語教育論における「道元」受容の様相を明らかにしていく試みの一つである。先稿において、<sup>①</sup>西尾実の自己超越の思惟様式に変化が生じるのは、調べ得た範囲では、大学進学のために上京して以後のことであり、そのことが著作の上に具体化するのには「道元禅師」(『信濃教育』大正三年四月)においてであったと述べた。

「超越」という考え方自体は、既に西尾実の飯田時代(明治四三年四月—明治四五年三月)に見ることができた。しかし、そこには「否定」概念を媒介にする考えはなかった。大正三年の「道元禅師」において、西尾実の著作上、初めて「否定」が姿を現したのである。調べ得た限り、西尾実の場合、「道元禅師」に至るまで「否定」の発想は認めることができなかった。大正三年は、その意味において、西尾実の「超越」論の展開上、転換の年となった。

「否定」の考えは、「超越」論に止まらない。西尾実国語教育論の成立と発展の上に大きな働きをすることになる。一例を掲げよう。「言語文化教育論の基礎体系」<sup>②</sup>である作品研究の方法体系を例にと

る。作品研究の方法は、鑑賞・解釈・批評の三相構造によって体系化されている。その際、体系化の原理として選ばれたのが「否定的発展」という否定的媒介の考え方であった。

文芸作品の研究における解釈は、鑑賞から研究へという方向をたどるばあいにおける、研究の第一歩としての位置を占めるいとなみである。注釈が鑑賞への準備であったのとちがい、これは、鑑賞からの発展として、鑑賞活動の否定を契機とした知的考察の第一歩である。これを研究の第一歩であるとするのは、その考察が、受身であって、あるものを、あるがままに受取る働きをその本領としているからである。研究の研究たるゆえんは、さらに進んで、そういう解釈を超え、解釈活動の否定を契機とした批判にある。しかし、その批判を真の批判たらしめる前提は、この解釈である。解釈は、鑑賞の否定的発展であり、批判の前提的基礎づけであるところに、その位置が見出される研究部門であるとしてよいであろう。<sup>③</sup>

「否定」は、このように、西尾実国語教育論において重要な役割を果たしている。それだけに、「否定」の発見は意義深いものがある。

では、西尾実は、いつ、「否定」に出会ったのか。それは、また、どのようにして行われたのか、などの疑問が生じてくる。これらの解明が、つぎの課題となろう。